日本YWCAの使命(ミッション)
イエス・キリストに学び、共に生きる世界を実現する
世界の人々と共に人権・平和・環境の問題に取り組む

第29総会期主題
平和を実現する人々は幸いである―マタイによる福音書5章9節

日本YWCAビジョン2015
(1)非核・非暴力による平和を構築する
・平和憲法をまもり、世界に広める
・市民レベルで東北アジアの信頼関係を築く
・女性と子どもの権利をまもる
・パレスチナYWCAの活動を支援する
(2)若い女性のリーダーシップを養成する

YWCA 8/9
AUG/SEP. 2008

発行所 日本キリスト教女子青年会
〒102-0074 東京都千代田区九段南4-8-8
Tel. 03・3264・0661
【四谷オフィス】
〒160-0008 新宿区三栄町6-12 2F
Tel. 03・5367・1872/FAX 03・5367・1873
E-mail. office-japan@ywca.or.jp
編集発行人 石井摩耶子
振替 00170-7-23723(毎月1日発行)
定価1部 150円
年間購読料2,200円(送料込)
www.ywca.or.jp

沖縄の地に暮らして

日本キリスト教団佐敷教会牧師 **金井 創**

意識・感覚のズレ

沖縄で暮し始めて3年目。まだまだ発見の連続です。いま私は沖縄の短期大学で非常勤講師をしていますが、先日のクラスでこのようなことがありました。ちょうど沖縄慰霊の日・6月23日に近い時でしたので学生たちにそれに関する質問をしてみました。学生たちが慰霊の日を知っているのは当然としても、驚いたのは8月15日が何の日か知っている学生が数人しかいなかったことです。「内地」では8月15日に戦争が終わったことをほとんどの学生が知らないのです。わずかに知っていた学生も中学あるいは高校の歴史の時間に教師から教えられたことを覚えていただけで、日常の生活で8月15日を意識していたわけではありません。これは「内地」に生きる人との大きな感覚のギャップでしょう。

そもそも沖縄の人にとっての終戦はいつだったのでしょうか。6月23日にしても当時の守備軍司令官、牛島満の自決によって組織的戦闘が終結した日というだけであって、その後も各地で散発的な戦闘・抵抗は続きました。

沖縄の住民も米軍にいつ保護されたか、捕まったのかは人によって違いますし、収容所から解放されてもとの家に帰れた時期もまちまちです。激しい戦闘が行なわれている一方で、収容所に入れられた住民の戦後の生活が始まっている。これが住民を巻き込んでの地上戦が行なわれた沖縄の姿です。だから8月15日を学生たちが知らないのも無理はありません。その日は沖縄の人々にとってほとんど意味のない日なのですから。

また1952年4月28日はサンフランシスコ講和条約が発効した日、日本が戦後の占領状態から独立と主権を取り戻した日です。しかしそこに沖縄は含まれていませんでした。1972年5月15日の施政権返還、いわゆる本土復帰まで沖縄は実質上アメリカの占領下に置かれ続けたのです。日本は沖縄を犠牲にして独立を果したともいえます。ですから4月28日は沖縄の人にとっては「屈辱の日」なのです。

このように沖縄に暮しているとかなり重要な事柄について「内地」との意識・感覚のズレを感じます。それは歴史にかかわる事柄だけでなく、現在の沖縄と「内地」に関してもいえることです。

「政府はやりたい放題」

沖縄県の面積は日本全体の0・6%、ほぼ神奈川県と同じ面積です。そこに在日米軍の専用施設の75%が集中して置かれています。これは異常な事態ではないでしょうか。この異常さを「内地」の人たちはどれだけ感じているでしょうか。基地の返還は遅々として進まず、それどころか新たな基地建設までが計画されています。

沖縄北部東海岸に位置する辺野古が新たな米軍基地建設予定地です。ここにはすでにキャンプ・シュワブという海兵隊の基地があります。辺野古では日常的にこの部隊が陸で、海で、空で訓練を繰り返しています。実弾射撃と爆発音が響き、サンゴを踏み潰し、絶滅危惧種である希少動物ジュゴンの食草を踏み潰して水陸両用車が走り、ヘリコプターが低空飛行をする。それが辺野古の日々です。そこにさらに海を埋め立てて2本も滑走路を持つ海兵隊のヘリコプター基地が作られようとしています。

大規模な埋め立てをするには環境アセスを行わねばなりません。政府はそれを定めたアセス法すら踏みにじって昨年から違法な調査を強行してきました。すべては2014年に基地を完成させるという目標のためです。ある地元の漁師がこんなことを言いました。「日本の政府は沖縄に対してやりたい放題じゃないか!」と。本当にそう思います。辺野古の海の美しさと豊かさを知り尽くした漁師の言葉は重いものです。しかもこの発言をした漁師は基地建設反対運動をしている人ではなく、調査のために政府に雇われた人なのです。

私は辺野古に基地を作らせない海上阻止行動の一員として週に2回は海に出ています。海上で直接対峙するのはこのように雇われた漁師・作業員です。この1年ずっと彼らと海上で出会い、話しかけ、関係を作ってきました。そういう中で私たちに本音をもらす人たちも出てきました。彼らも海は守りたい、こんなところに基地は作ってほしくないと心の底では思っています。けれども、これしか仕事がない、借金がある、あるいは圧力をかけられるなどの理由で政府に雇われています。先の漁師も日本政府に対する激しい怒りを持ちながら、「でも政府が決めたらしょうがないんだ。選挙に勝たなきゃだめなんだよ」と無念そうにつぶやきました。政治が変わらなければこの現状は変えられない、半ばあきらめながら海に出てくるのです。

あきらめはしない

観光立県沖縄・癒しの島沖縄・南国リゾート。「内地」の多くの人が沖縄に対して抱くイメージです。しかし、一方で日々このようなことが起こっています。日本政府の都合は過去においても現在においても沖縄に重くのしかかっています。いつになったら沖縄は自分たちの現在と将来を自分たちで決めることができるのでしょうか。でもあきらめはしません。たとえ少数であっても、力はなくとも、非暴力で平和を創造していく歩みを全うしたいと思っています。

四川省大地震被災者救援活動

中国YWCAは被災直後の交通規制が解かれてからは、被災地に赴き被害状況を調査、食料・衣料などの緊急支援から、精神的ケアを含む長期的な復興支援に重点を移しています。中国全土のYWCAでも、募金活動や被災地の生徒たちに励ましの手紙を送る活動を続けています。

バザーの喜び「人・ひと」

會津昭代

少々月日が経ちましたが、函館YWCAでは去る6月、年に1度のバザーを開催しました。

当初バザー実行委員会のメンバーは頭を悩ませていました。ご存知の通り原材料の価格高騰、そしてバター不足。食堂は例年通りのメニューを出せるのか、手作りの食品が無事に販売できるのか、寄贈品は集まるのか、と不安の日々でした。しかしバザー実行委員の努力と地域の皆さんの協力により、例年通りの規模でバザーを行うことができ、結果は大盛況。私たちは胸を撫で下ろしました。環境と消費について考えざるを得ない今、バザーが見直されてきているのかもしれません。

バザーのために集まってくださった方々は、函館YWCAの財産です。バザー実行委員をはじめとして、会員・賛助員・会友、YWCAに協力してくれる人、何かしたい人、そして子どもたち。さまざまな人の力が繋がり、バザーが作られていきました。毎日取り組んでくれた人、仕事の休日の度に来てくれた人、家庭や他活動の合間を縫って来てくれた人、当日は来られないが日々準備を進めてくれた人等、皆さん貴重な時間を割いてご尽力くださいました。YWCAはこのことに感謝を忘れてはなりません。

バザーに携わることで知る喜び、それはバックグラウンドの異なった、異年齢の人たちとの関わりです。新しい出会いや、再会の楽しみも待っています。作業においては、知らなかった調理法に感嘆したり、家庭とは違う大きな鍋での調理に楽しさを覚えたり、衣料や雑貨の山に囲まれ「非日常」を感じたり。当日は俄か「お店」で、お客さんとプチ・コミュニケーション…いつもの生活とは違う楽しさを発見している人も多いはずです。

楽しいだけがボランティアではありません。しかし楽しみや喜び、その共有が社会変革に立ち向かう原動力になると思います。

バザーはYWCAの活動・ボランティアの在り方を確認する良い機会となっています。

(函館YWCA会長)

エンパワーするNGO YWCA

甲府YWCA
第26回原爆絵画展お知らせ
つたえていこう ヒロシマ・ナガサキ

第26回原爆絵画展は、「つたえていこうヒロシマ・ナガサキ」のテーマの下、8月5日~8日甲府市の県民情報プラザで開催します。甲府YWCAが四半世紀以上もの間、会員が結束して取り組んできた平和プログラムです。

主な展示物は「広島市民の描いた原爆の絵」60枚、丸木位里・俊作「原爆の図」より「虹」の大作と「原子野」・「灯籠流し」。県内在住被爆者の絵(原画)10枚と証言文は、身近に被爆者がいることを知らせる貴重な資料です。長崎の資料が少ない中で「ヒロシマ・ナガサキ写真パネル」は両方を対比させた記録写真。今年は長崎YWCAのご好意で所有の資料をお借りする予定です。その他原爆詩の書パネルや会員が平和への祈りを1針1針に込めて作ったピースキルト、核年表が飾られます。会場にはビデオコーナー・図書コーナーがあり、折り鶴コーナーで来場者に折っていただいた鶴と1年かけて個人または施設で折って下さった千羽鶴をあわせて広島文化センターに送ります。日本YWCA・世界YWCAの活動を知らせる展示コーナーも設けます。

8月6日には県内在住被爆者を囲み被爆(広島・長崎)体験を語っていただき、質疑応答や感想を述べていただくことにしました。第1回より県・市教育委員会、甲府市及び報道機関の後援をいただいていることが大きな支えとなり、多くの市民の支持を得ている証拠です。

アンケートでは、戦争を知らない子ども・若者たちがその悲惨さ残酷さを知り、平和への思いを熱くし、そのために何か行動したいということが伝わり、主催者側も毎年励まされます。さらにこの展覧会の重要性と継続を訴えられる方が多く、責任の重さを感じると同時に次回開催への押し出される思いになります。ぜひご来場下さい。

甲府YWCA 五味優子

本の紹介

「おひとりさまの老後」

上野千鶴子著
法研発行
1400円+税

地域の書店でも平積みになっていた上野センセイの新著、タイトルに惹かれて手に取った。おもしろく、実用的。パートナーがいてもいなくても、子どもがいてもいなくても、女性は老後にシングルになる確率が非常に高い。そんなあなたに、シングルの達人がシングルライフの極意を指南。介護問題の研究成果の楽しい報告書でもある。「おひとりさまの老後」の住まい・交友・介護・お金・遺言・ケアの受け方十か条まで、30代の私にもためになる情報満載。

(編集委員 西文子)

バングラデシュYWCA サイクロン被災者への緊急援助報告

サイクロン被災者救援として、皆様からいただいた募金(合計37万2,769円)を5月22日、日本YWCAからバングラデシュYWCAに送金しました。この度、バングラデシュYWCAより救援活動報告書が届きましたので、皆様のご協力に改めて感謝すると共に、報告を抜粋して紹介します。

2007年11月15日のサイクロンによる甚大な被害の後、バングラディシュYWCAは次の3段階の緊急支援を実施した。第1段階は食料支援で、被災者2141世帯にそれぞれ7キロの米と2キロの豆を配給した。

第2段階の生活支援では、畑の収穫など生計を失った1963世帯に対し、各1000タカを奨励金として支給した。これを受けたほとんどの人が、ビジネスや技術習得や農業に投資し、支援自体は少額であったが、有益なものとなった。少なくとも彼らはそれをもとに何かを始めることができた。

第3段階の援助は住宅供給であり、約279世帯に対し、補助金として各3000タカを支給した。対象は、他からの援助がまったくなく、完全に困窮している世帯であり、女性が世帯主の家庭を優先した。住居供給補助を受けたすべての人が、その補助金を修理・再建のために必要な材料を買うために使った。

日本YWCAから受けた総支援額244,241タカ(37万2,769円)により、バングラディシュYWCAは住宅供給を82世帯増やすことができた。

YWCAの支援を受けて家屋の修復をする被災者

修復後の家屋

YWCAは主に、貧しい人・恵まれない人・支援や情報を得ることが難しく、他の機関からの支援も乏しい人々に支援をした。何百もの命を奪い、何百万タカという財産を破壊したサイクロン被害に対し、YWCAの援助額は大海にバケツで水を注ぐようなものであろうが、YWCAは多大な支援をしたと認められている。それはこの支援が、苦難の真っ只中にある人々にとって少しでも救済になったからである。

サイクロンが襲って数カ月がすぎ、人々は次第に通常の活動を再開し始めた。しかし、生活は以前にもまして苦しい。それは、食料は依然として欠乏し、住まいは十分なものであるとは言えないからである。

(翻訳:日本YWCA 翻訳ボランティア)

ご協力ありがとうございます

賛助費(以下敬称略)

渡辺峯 梅本弘子 鴨打美葦 亀田芳子 板橋俊子 川尻泰子 秋枝蕭子 星野花枝 五味優子 荒井重人 山田愛子 谷口道子 伊藤悦子 小出貴美 小林多美 岸田晃子 西村律子 大野綾子 手島弘美 加藤順子 滝田禎子 今村梅代 古銭ミネ 渡辺順子 三浦篤子 東山千代 帆足道子 白井裕子 松岡励子 井垣寿子 安江恵津 関口静子 柴田静子 鎌原恵子 戸田照枝 鈴木みき 小貫ツマ 山本鉄子 水野潔子 濱田映子 野呂幸子 三宅文子 布村耐子

湯前知子 松井倫子 松岡信子 武藤久子 北垣景子 小泉陽子 今井美令 浦田伸子 北村和子 神津房子 牛尾保子 土居松枝 諏訪昭子 清井よし 設楽順子 池上幸子 井上恵子 井田すみ 島田麗子 村上雅子 寺山朝子 松田和子 原田早苗 小原尚子 赤木弘子 加藤美保 岩島久夫 川村悦子 内山伸子 高橋栄子 狩野紀昭 白井寿子 服部友子 石川和子 仙波容子 兼清和子 田口美穂 長塩滋子 島田法舟 篠山淳子 青木基子 青木恵子 八木高子

原田由美子 大田八千代 阿部喜久子 中西トク子 武藤ハツエ 稲葉和寿子 横山キミイ 徳光美奈子 有田楠峯子 栗原佐代子 宇都宮芳子 木岡小枝子 鳥海百合子 富田美樹子 小山内まり 鈴木玖仁子 出 かず子 芝沼喜久子 嶋崎紀代子 伊藤いく代 馬上貴美子 高橋須賀子 八田さと子 田村恵美子 大澤恵美子 大里喜美子 高橋美佐子 松原恵美子 奥平せい子 鈴木千鶴子 林 亜紀子 武井真美子 渡辺寿美子 五十嵐和子 祖父江温子 平木貴美子 中平多恵子 高橋キヨ子 毛利亮子 江副富子 堀江宣子 淀川敬子 宮澤玲子

矢崎園 服部素 今井栄 崔善愛 森晶子 秋田稔 井出都 鴨康子 湊晶子 片山恵 村上伸 長清子 皆川悦子 伊藤眞代 浅田和美 篠原洋子 梅林宏道 天野冴子 早田紀子 神山妙子 今井菊江 宮原栄子 中山ふみ 佐々木真千子 阿武桂 佐古口道子 原芙左恵

平和教育資金
石井摩耶子 鮫島晋助

オリーブの木募金
設楽忠雄 J・E・ランデス 小松宏三 広島YWCA

国際協力募金「ジンバブエ支援」
佐藤綾美 毛利亮子 江尻美穂子 渡辺峯 西文子 呉YWCA 沖縄YWCA 熊本YWCA

国際協力募金「ミャンマー(ビルマ)サイクロン被災者救援募金」
北村和子 毛利亮子 江尻美穂子 大野綾子 黒木雅子 荘司佳都美 平野恵子 渡辺峯 大澤菜穂子 芦川浩 西文子 武内冨貴代 仙台YWCA 沖縄YWCA 熊本YWCA 呉YWCA

国際協力募金「中国四川省大震災被災者救援」
北村和子 毛利亮子 江尻美穂子 梅本弘子 大野綾子 荘司佳都美 黒木雅子 池上幸子 大澤菜穂子 平野恵子 佐藤綾美 岩城紀代子 侘美貞子 渡辺峯 武内冨貴代 西文子 芦川浩 呉YWCA 仙台YWCA 熊本YWCA 沖縄YWCA

パレスチナYWCA支援募金
広島YWCA

国際協力募金「緊急国際協力募金」
鈴木みき 実生律子 大里喜美子

世界YWCA賛助費 大里喜美子

一般寄付 唐崎旬代

(2008年6月20日現在)

国際コミュニケーション・チーム主催 翻訳ワークショップ開催

日時:2008年6月22日(日)14:00~17:00
会場:日本聖公会管区事務所3階会議室

昨年の盛況を受け、今年も「翻訳ワークショップ」を開催しました。講師には、横浜YWCA会員で翻訳家の加地永都子さんを迎え、雨の中、定員20名の参加をいただきました。

参加者は、翻訳を仕事にしている人、YWCAで翻訳活動をしている人、言語に興味がある人、今回のテキストで用いたHIVとAIDSの問題に興味がある人などさまざまで、年齢もさまざま。まさに、YWCAの特長である「年齢を超えた、多様な関心とスキルのある女性たち」が集う会になりました。

(国際コミュニケーション・チーム 根岸朋子)

沖縄から日本が見える

特集

3市（横浜・湘南・平塚）YWCA 沖縄デー

「ひめゆり」からの命のバトン

今年の横浜・湘南・平塚の3地域YWCAによる沖縄デーのイベントとして4月4日に、ドキュメンタリー映画「ひめゆり」を上映した。昨年12月に決定して、3カ月の周到な準備は素晴らしい実りをもたらした。400枚近いチケットを売り、当日の入場者は320人。以下に、参加者の声を紹介したい。

「想像していた以上に内容がつまっている映画でした。初めは怖いと思っていたのですが、司会の方がおっしゃったように、途中から『聞かなきゃいけない』と思うようになりました」（10代）。「柴田監督とカメラマンの方のお話もあり、とても良い上映会でした。息子たちと一緒に見れて良かったと思います」（40代）。「極限を通り抜けた人たちの凄さが伝わりました。命の大切さを改めて感じさせられました。沖縄の人たちは大変な経験をなさっていますね。なぜ、今もそこに基地があるのでしょうか？」（70代）。

上映会後の出来事もいくつかある。横浜YWCAの金剛静慧さんが朝日新聞の「声」欄に投稿、「若い人たちの感性に、将来への希望と勇気を得た思いだ。ひめゆりの人たちから命のバトンを渡されたことを実感した」と書いた。また、平塚YWCAの若い会員が勤める高校の修養会で、男女の生徒たちが「ひめゆり」を観た。3部に構成され、それぞれに休憩をはさみ、ワークシートで理解を深めながら進めたそうだ。彼女は「生徒たちの受け止め方はさまざまだが、少なくとも沖縄がかつて戦場となったことを知らない生徒は一人もいないはずです」と語った。最後に、柴田監督の言葉「この映画は、今を生きる私たちに多くの示唆と希望を与えるものと信じます」と共に、多くの若者たちにこの映画を届けたいものだ。

私たち3市Yの沖縄デーは、沖縄に米軍基地がある限り続くであろう。3市の絆を強め、単独では無理なことも3市Yならできることを私たちに実践的に教えてくれた。「ひめゆり」が残してくれたものはまさに柴田監督の言う、示唆と希望だった。

平塚YWCA　三股まさ子

辺野古報告

体をはっての 米軍基地建設阻止行動

午前6時過ぎ、辺野古漁港から車で20分ほど北にある汀間（ティーマ）漁港に、船を台車に乗せ急なカーブ続きの道を今日も急ぐ。米軍基地建設に向けた「現況調査」のための国の作業車が次々と入ってきた。中から作業員とダイバーが順次降り、数々のタンクを降ろした。私たちはそれらの数を手早く数える。この準備状況をしっかり把握することにより1日の阻止行動が決まるのだ。時には6時過ぎ汀間漁港に着いた時に、数えきれないほどの作業車があり、既にダイバーがたくさん乗っている作業船を、フルスピードで追いかける日もある。海上阻止行動を予想して機材をきっちり組み立て、海中に投げおろすだけですむように周到な準備がされている日もある。

昨日の話をしよう。早朝から汀間漁港に10数隻の作業船がスタンバイ。体を張って阻止を、と集まった海上行動隊の数は朝6時台で3人、7時台で5人となった。「よし、ボート2隻出せるゾ！」と海に出た。しかし海上行動隊の人数が少ないと判断したのか、作業船が機材を乗せて次々と出港し始めた。私たちは力を限りに携帯電話やメールで仲間に呼びかけた。「早く集まってくれ、辺野古へ！」と。だが圧倒的な数と力の差で機材が次々と設置されてしまった。午後には海上保安庁4隻も加わり、20隻が私たちをグルリと囲んだ。こちらのダイバー3人に対し国側は20人。海底でカメラ機材設置抗防のすさまじい光景がくり広げられた。

「新基地建設反対！」をいくら声を限りに叫んでも、目前で着々と進められていく現実に対して、止むに止まれぬ気持ちで体を張って海上で阻止行動をする私たち。日本と米国を相手に阻止するには、あまりにも人の数も、技術も力も弱すぎる現実を、攻防の度に思い知らされている。

●

日本政府は米国に「思いやり」の名目で巨額な札束を差し出している。1979年に62億円で始まった「思いやり予算」は今年2083億円。何と30年間で5兆1000億円にも達しているのだ。米国にとってこんな甘い話はない。

体力も金も権力もない私たち。ヘトヘトになった体で夜、聖書を開ける。「信じて祈るならば、求めるものは何でも得られる」（マタイによる福音書21章22節）「うーん」とうなってしまった。この御言葉に。しかも「あなた方も信仰を持ち、疑わないならば」（同21節）とあったのだ。海底でくり広げられる、あまりにもすさまじい攻防の光景に私は「神さまどうして一緒にいて下さらないのですか？」といつも共にいてくださっている神に疑いの目を向けてしまった。「神さま、こんな闘いをいつまで許されるのですか？」と思ってしまった。揺れずに信じて祈ることの出来る信仰を与えて下さい、と切に祈った。

沖縄YWCA　宜野座映子

東京YWCA「月桃の会」

痛みを受けとめたい

街の真中に米軍の基地があり、それを避けて人々が生活している沖縄。基地内に居並ぶ軍の飛行機の数々を目の当たりにし、戦闘機の轟く爆音を聞いた時、これが憲法9条を持つ日本の沖縄県かと思いました。沖縄に行って初めて知った想像を超えた実状、それを身体全体で受けとめ、沖縄のことをもっと知らなければと勉強会を始めました。今から10年前、こうして「月桃の会」がスタートしました。

沖縄の地元紙「沖縄タイムス」を開くと全国紙やテレビなどからは、到底知り得ない厳しい現状が見えてきました。さらに沖縄の歴史をしっかりと捉えるためにその歴史を紐解き学びをしました。

日本は琉球王国を何度も侵略し、差別してきました。沖縄は戦争で地上戦を経験するなど最大の被害を受け、戦後はアメリカの軍政下で苦しみ、復帰後も基地の中に置かれています。さらに日本は沖縄を犠牲にして復興し、アメリカの言いなりに軍備を増強しています。そのほとんどは沖縄に集中し、軍事基地は沖縄を蝕んでいます。

再び戦争をしない、軍隊を持たないとはっきりと記した憲法第9条は、沖縄の人々の切なる思いであり、これによって安心したといいます。しかし、沖縄は憲法の指し示す平和とは程遠いところに今も置かれています。

沖縄の背負わされ、苦しめられていること、その思いを知り、少しでも共に考え荷を負えたらと願って活動を続けています。

沖縄の花から名付けた「月桃の会」は本を読み知識を深めつつ、情報交換をし、辺野古を守るための防衛省への申入書の提出、支援のカンパや署名などささやかな行動もしています。いつも困難な心痛むことと向き合っていますが、いい仲間との心安らぐひとときでもあります。

東京YWCA　斎藤喜子

月桃はショウガ科植物で、緑濃色の葉には独特の芳香があり、初夏には白く可憐な花が咲き、初秋には赤茶色の実がなります。さまざまな効能を持ち、沖縄では生活の中に取り入れ、欠かすことの出来ない植物です。

辺野古で　度肝をぬかれた

ジュゴンの棲む辺野古に行きたい！　4月、沖縄YWCAの大城美代子さんに電話をかけた。「辺野古へは私も行っています。那覇から週何回か市民連絡会の車が出ていますよ」。親身な大城さんの言葉に勇気をもらって出発した。

辺野古漁港のそばに「新基地建設阻止」と掲げた小屋があり、ダイバースーツが干されていた。（中略）浜は有刺鉄線のらせん網で分断されていた。米軍側の浜では水陸両用戦車が走る日もある。境界のらせん網は「ちゅら海を守る」など平和への想いを書いた色とりどりのリボンで縁取られている。

新しいリボンを一心に結んでいた牧師の平良修さん。「私たちは、非暴力で闘おうと決めたんです」「日本YWCAの新聞記事で、辺野古に70代の女性ダイバーがいるとか…」「私の妻です。朝から沖に出て政府の作業を止める努力をしています。彼女は海で私は浜。…ながい闘いになるでしょう。でも今だからできるんです。妻の持論『年金生活者は辺野古においで』ってね！　逮捕されたら、刑務所を年金生活者でいっぱいにしてやろうって」。腰の据わったその決意と行動力に、度肝を抜かれた。「年をとっても、平和をつくることをあきらめなくていいんですね!!」

「いのちを守る会の闘い8年。座り込み1458日目」とある本部テントでは、厳しい状況に刻々と対策が立てられていた。「ボーリング調査など海岸部での闘いの時は、座り込みの人からも見えたし海上のメンバーと一体感がもてた。今は作業がずっと沖になったから、携帯電話で交信しているんです」。

歌手のCoccoが言ってたっけ。「日本人は一度は沖縄に来て、沖縄を見なくちゃいけない」。ここに来なければ想像も出来なかった日本の姿。黙ってやりすごすなんてできない。佇んで泣いているわけにもいかない。どうすりゃいいんだ!?　声をあげて行動できるのは、私たちかもしれない。

呉YWCA　長坂知春

＊呉YWCAニュース6月号より転載

種

「イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。そのうち、時もだいぶたったので、弟子たちがイエスのそばに来て言った。『ここは人里離れた所で、時間もだいぶたちました。人々を解散させてください。そうすれば、自分で周りの里や村へ、何か食べる物を買いに行くでしょう。』これに対してイエスは、『あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい』とお答えになった。弟子たちは、『わたしたちが200デナリオンものパンを買って来て、みんなに食べさせるのですか』と言った」。

マルコによる福音書6章34～37節（＊1デナリオンは1日分の賃金に当たる）

「そんな無茶な！」と思う。5000人、いや女性や子どもたちも入れればその3倍以上もいると思われる人々に、すぐに食べ物を配るなんて到底無理。合理的に考えれば、弟子たちのように言いたくもなる。そしてそこにあったのは、たった5つのパンと2匹の魚…。

しかし、世の中の悲惨な現実を目にして、私たちは知らんぷりをし続けるのだろうか。「こんなこと、このままにしておいていいのだろうか」と、目の前にいる人々の痛みに心の底から衝撃を受けたイエスは、「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」と言った。そして自ら祈って、パンを裂いた。5000人とか数万人とかの塊ではなく、1人ひとりの痛み傷ついた人がそこにいる。その人の涙と痛みを知った者が、ひとり、またひとりと突き動かされてきたから、私たちは不可能という壁を乗り越えてきたのではないだろうか。痛みを通して人は深く繋がり合うのかもしれない。人間の弱さと限界を知りつつも、さらに先にある希望を信じて、祈ってパンを分ける者、それを渡し続ける小さな手がある。そこに「不可能」という壁を越える何かがあるのではないだろうか。ひとりの人も悲しみの中に置き去りにせず、すべての人が満たされるために、今日も祈り、運び続ける人々がいる。

菊地恵美香（日本キリスト教団六角橋教会牧師・横浜YWCA会員）

世界YWCA機関紙「コモン・コンサーン」

世界のYWCA女性たちと出会い、つながり、視野を広げるチャンス、あなたもぜひ手にしてみませんか？

世界125カ国にひろがる各国YWCAの女性たちはどんな課題を抱え、どのような活動をくりひろげながら、自分たちを成長させ、より良い社会の変革に貢献しているのでしょう？　年4回発行の世界YWCA機関誌「Common Concern」（日本語版「コモン・コンサーン」）は、その題名のとおり、YWCA共通の関心事（人権・平和・環境問題など）に取り組む女性たちの考え・行動・成果などを多彩に興味深く紹介しています。女性たちに深刻な影響をもたらしているHIVとAIDSの蔓延をくい止めるために草の根から国際レベルに至るまで果敢な取りくみをリードするアフリカのYWCA、貧困やグローバル経済による搾取の悪循環を断ち切り、女性や子どもたちの健全な自立成長をめざす開発途上国のYWCA、占領や紛争下にあって、自由と平和を祈り行動する中東YWCA、自然災害からの復興支援に取りくむYWCA、女性への暴力反対や子ども虐待防止の運動を推進するYWCAなど、「コモン・コンサーン」にはYWCAで活動する世界の女性たちの愛と力と知恵が凝縮されています。

今夏発行の日本語版136号では、移住女性の問題をテーマにした日韓ユース・カンファレンスに参加した若い女性たちの活躍も紹介されています。ぜひご購読下さい。

国際コミュニケーション・チーム　俵恭子

●日本語版：年4回発行　1部300円　年間購読1000円（送料別）

〈お申込み・お問合せ〉日本YWCA国際コミュニケーション・チーム（担当：根岸）

連絡先：Tel：03-5367-1872　Fax：03-5367-1873　E-メール：office-japan@ywca.or.jp

My Story Her Story

今から50数年前、私がまだ幼稚園児の頃、帰宅すると自転車の後ろに乗せられて、久我山から三鷹まで母の背を見ながら当時の「もより会」に連れていってもらったのが、私のYWCAとの出会いであった。私の祖母は旧姓由比喜代といい、戦中は東京YWCAの職員で、私の祖母は北里清子といい、東京YWCAの会員である。我家の食卓は、小さい時から母がYWで習ってきたしゅうまい・春巻・肉まん・パンなど、口に入るものはほとんどすべてが母の手作りだった。当時はめずらしかった中華料理は、家族にとっては大ごちそうだった。母がYWで学んできたすべてのことが、今の私の人生の根底に流れる。奉仕をするとは、人とのつながり等々、母を通してYWCAから受けた賜物だと思う。祖母はクリスチャンだったが母はクリスチャンではない。しかし、YWCAの精神を「もより会」ですりこまれていた影響だと思う。私のその後のYWとのつながりは、中学生キャンプに参加させてもらったことと、20歳になってリーダー養成キャンプに参加したことぐらいであった。

今から5年前に、久々にYWCAとかかわるようになって思ったことは、昔の私にとってのYWは、時代の先端をはっきりとした意志をもって活動していたように思う。だから魅力的だった。辛口な言い方かもしれないが、現在のYWCAは、「時代の先端をいってるのかな？」と内容をみると、世の中ですでに実行されていることが多いと思う。何か違う切り口で、女性だからこその、枠にとらわれない、生活に根ざした自由さとたくましさをもった活動があって良いと思う。

その活動の根底に世界YWCAが脈々と持ち続け大切にしてきているキリスト教精神を、本当の意味でかかわる一人ひとりが団体のもつ精神として学び直し、はっきりと神の前にこれからの時代を担う、時代の先端を受け持つ働きが何かを問い直すことが大切なことと思う。クリスチャンになるかならないかは個人と神との間のこと。YWCAという、一つの団体としての神さまからの使命を、この世界の中で、またこの日本の中でいかに担っていくか？　小さなことと言われるかもしれないが、不思議なことの一つに、YWCAの委員会の前の「黙祷」がある。キリスト教のロゴスではじまる精神には、祈れる人が祈る「言葉による祈り」ではないかと思う。これからも「神と人々」に仕えるYWCAであってほしい。

東京YWCA　山田順子

9の日行動 展開中④

長崎YWCA

長崎で「9の日行動」と言えば、「反核9の日座り込み」行動を指す。それは8月9日の原爆投下日を祈念し、平和記念像の前で毎月9日に反核・平和を願って座り込み行動が続けられているからである。

私たち長崎YWCAは、発足当時から、被爆地として「核否定の思想」に立って平和への希求・憲法9条・教育問題などを社会問題研究として学び、具体的課題の中から地域に合った活動を続けてきた。その一つに「平和の母子像」建立・20年間の祈念会開催事務局の奉仕が挙げられる。また、日本YWCAの憲法研究会は、地域YWCAにとっては時節に合った学びと社会の動きを見据える目と力を養わせてくれたと思う。1998年「新ガイドライン」の学習から〝9条が危ない〟との危機感を持ち、「憲法9条を堅く守ろう～平和を実現する人々は幸いである」のステッカーを長崎Y独自で作成配布した。

この年の8月、高校生平和大使は「核兵器廃絶と世界平和」を訴えて、女性NGOである世界YWCAを初めて訪問し、長崎Yからも2名が同行・交流した。「ビリョクでもムリョクではない」を合言葉に、今夏もジュネーブの世界YWCAオフィスを訪問する。

●

さて、長崎県各地には「9条の会」が多く結成され、「ながさき9条フェスタ春・秋」が市民レベルで4年間継続して開催されている。長崎Yも実行委員として参加し、ブースでは、世界Y訪問の写真展示や長崎弁の憲法しおり・9条ビラ・戦争箒・学習パンフなどを配布。手作りゼッケンを胸に市中デモ行進にも参加してきた。

「戦争ができる国」の方向へ急速に進んでいる日本の歯止めには、国民が「憲法9条」を真剣に守ることが必死である。全国YWCAとして何か行動できないかと思案している所にYWCAオリジナル9条カードが作成された。早速、長崎YWCAとして全会員で「全国YWCA　9の日一斉行動」に取り組んだ。もちろん、世界YWCAの平和大使訪問のおみやげは「9条カード」を持参した。うれしい成果としては、ある会員が以前留学した先のメソジスト教会の牧師に手紙を出した中に、9条カードの説明をして同封したところ、次の返事が届いた。

「あなたからのカードを受け取りました。ありがとう。私はこのカードのメッセージを大変素晴らしく思います。そして、私の住むコミュニティの多くの人たちと分かち合うために、多くのコピーを準備しました。全世界がこのメッセージに耳を傾ける必要があります」。会員の方は「このように9条カードの効果が見えるところ、見えないところで広がっていくことをうれしく思う」と便りを訳して報告された。

長崎YWCA　熊江雅子